

Weekly Report



名古屋アイリスロータリークラブ

例会日	水曜日13:00～14:00	会長	菊地富士子
例会場	ANAクラウンプラザ グランコートホテル名古屋	幹事	山田智博
承認	2013年6月18日	公共イメージ 向上	藤谷 猛



奉仕しよう みんなの人生を豊かにするために

2021～2022年度名古屋アイリスRCのテーマ

ロータリーの輪を広げ、共に奉仕しよう。
～心に豊かさを～

●お問い合わせ：office@nagoya-iris-rc.jp

●公式WEBサイト：http://www.nagoya-iris-rc.jp

第405回 例会

2022年6月8日 13:00～

- 司会 岩崎幸弘 例会・出席・親睦委員
- 斉唱 我らの生業
- 出席報告 出席者数 13名 / 27名
出席率 48.0%
- ゲスト 名古屋北RC 小川剛史様
名古屋北RC 加藤剛司様
名古屋北RC 加藤慶人様

ニコボックス

- 名古屋北RC 小川剛史様
本日の卓話、宜しくお願ひ致します。どんな話をするかは、これからのお楽しみです。
- 名古屋北RC 加藤剛司様
本日はお世話になります。たけ7海舟さんの卓話楽しみです。菊池会長、いつもありがとうございます。
- 名古屋北RC 加藤慶人様
本日は、お世話になります。ふじこさん、あと1ヵ月ですね。最後まで、走り抜けて下さい。
- 菊地富士子 会長
小川剛史様、加藤剛司様、加藤慶人様、アイリスによろこそ。小川様、卓話を楽しみにしています。
- 山田智博 幹事
小川剛史様、加藤剛司様、加藤慶人様、本日は、よろこそアイリスへ。卓話、楽しみにしております。
- 加藤正広 副幹事
北ロータリークラブの皆様、そして小川様、卓話を宜しくお願ひ致します。
- 生田瀬津子 運営委員
名古屋北ロータリークラブの小川剛史様、本日は宜しくお願ひ致します。また加藤剛司様、加藤慶人様、お越し頂き、ありがとうございます。

会長挨拶

皆さんこんにちは。本日は第405回例会です。例会に参加いただきありがとうございます。本日は名古屋北ロータリークラブより小川剛史様、加藤剛司様、加藤慶



人様にお越しいただきありがとうございます。お三方は私の句友でございます。小川様には後程卓話をいただきます。鎌倉殿のお話ということで大変楽しみにしておりますのでどうぞよろしくお願ひします。

夏井先生のプレバトのおかげで若い層まで俳句が広がっています。俳句とは広辞苑によりますと五・七・五の三句十七音を定型とし季語を含むことを原則とする短詩と書かれております。句を詠むとき、ふさわしい時期、時間の季語を選びます。また17音ですのでこれ以上省くことができないという程度まで捨てる必要があります。主格が削り落され動詞が省略されることもあります。それでもそれがどんな人かは容易に想像できる必要があります。省略することで読者の想像力を誘い込む余韻を残すことができます。

例えば「ある一本の木に咲いている梅の花を見つけました。たまたま見つけたその花のもまだ枝の先に1つ2つ綻びているだけでした。それがかえって探梅の気分を満たしてくれました」と感動しました。これを俳句にすると「探梅や枝のさきなる梅の花」となります。これは高野素十の名句です。俳人であり医師であり高浜虚子に師事の方です。探梅とは早咲きの梅を求めて山野に出かけることの意味の季語です。枝の先を残したことで読み手は情景が視覚的にとらえることができます。また枝の先ならば満開の梅ではなくまだ咲き始めであることが分かります。私が属しております結社では「即物具象」を大切にしております。「俳句は物を素直に見ることがはじめてであり終わりであり。偶然との出会いや驚き、発見を十七音で伝えるので、捨てる必要があります。最後に残ったものが、「ああ」感動をもたらしたとき真の写生俳句が生まれるのです。感動したことをきちんと写真して、相手に伝わるように詠むことです。

またうれしかったこと悲しかったことから離れて客観するところに面白みがあるのです。」俳句との出会いによりものの見方が変わり景色が変わります。風が吹けば若葉風、青葉風、青田風と味わいます。些細な日常に喜びを覚えることが出来ます。

幹事報告

2022年8月5日(金)に、「ロータリー財団セミナー」が開催されます。これは、2022-23年度の財団寄付目標や、ルール改正を行った地区財団活動資金の活用方法等、『ロータリー財団についての理解を深める』セミ

ナーです。

開催日 :2022-08-05(金 曜)

開催場所 :名 古屋東急ホテル 3 階

登録受付時間 :12:00 登録受付及び昼食(出席者全員)

開始時間 :13:00

卓話

歴史講演『北条政子』

～鎌倉幕府を牽引した尼將軍～

卓話者:名古屋北ロータリークラブ

小川剛史(歴史人:タケ海舟)様



只今ご紹介に与りました、名古屋北ロータリーの小川剛史でございます。今日は名古屋アイリスロータリー様の卓話スピーカーとしてお招き頂きまして誠にありがとうございます。

本業ですが、名古屋市東区で水飴を中心とした食品原材料卸売業を営んでおります。明治45年創業で私が四代目ですが、何故か本業よりも歴史が大好きで、10年以上前から人前で歴史に関するお話をする様になりました。そして、ある先輩に付けて頂いた名前がタケ海舟であります。因みに菊地会長始め、名古屋北ロータリーのお仲間からは『タケ先生』と呼んで頂いており、大変ありがたいかも、お恥ずかしい限りであります。

さて今回の卓話では、大河ドラマ『鎌倉殿の13人』に登場する、ある女性に迫って参りたいと思います。

その女性とは、小池栄子さんが演じておられます、源頼朝の妻 北条政子であります。政子という女性は、自分の気持ちに大変忠実で、それに従って発言・行動することが多く、その結果、良くも悪くも周囲に様々な影響を与えるという、当時としては極めて異質な女性であったと思われれます。

そして、その功績に対する高い評価の一方で、婚家よりも実家を優先した？結果、息子達を死に追いやり、源氏將軍を三代で断絶させた悪女であるという辛辣な評価も下されています。私は政子进行评估する等と、おこがましいことはできませんが、史実から彼女がどのような女性であったのか？については、皆様に紹介、そして自身の考えを伝えられるかと思っております。今日はその様なスタンスで卓話をさせて頂きまますので、短い時間ではありますがよろしくお願ひ致します。

さて、まずは政子の出自からお話したいと思ひます。

1. 政子(1157～1225)の出自

史料からみる呼称の変遷、政子は伊豆国の在地武士である北条時政の長女として生まれました。母親は誰なのか？史料では確認することは出来ません。但し同時代の事件を扱った『曾我物語』では曾我兄弟の伯母とされています。兄弟の祖父が同じ伊豆の武士である伊東祐親であり、彼等の父親祐泰の兄弟姉妹の一人が時政の妻、すなわち北条義時や阿波局(実衣)の生母でありますので、これが事実なら政子の母も祐親娘であったと思われれます。

政子の名前ですが、かなり後年の1218年に上洛した際、朝廷より位を授けられた時に(朝廷から)賜ったとされています。政子の政は父時政の一字から取ったものと思われれます。つまり、それより以前はどの様な名前と呼ばれていたのかは分からない訳です。史料においては、夫の頼朝生前は御台所(みだいどころ)、頼朝死後は落飾したので尼御台(あまみだい)、他に二位尼(にいのあま)、禅定二位家(ぜんじょうにいけ)二品禅尼(にほんのぜんに)、二位殿(にいどの)等が散見されます。これは先述の通り朝廷より二位の位を授けられてからの公式の呼称であり、普段呼ばれていた訳ではありません。尚、北条政子ではなく、平政子(たいらのまさこ)が正しい名前です。

因みに、平？と聞いて気付いたかもしれませんが、北条氏は伊勢平氏の一流なので公式な場合は本来の氏である平を用います。また当時の女性は他家に嫁いでも実家の名字で記述されることが常でした。尚、本人は生前、自分のことを政子と名乗っていません。どんな名前だったのか？興味が湧きます。これを発見したら歴史的大事件ですね！

2. 政子の人格について

人柄に関してですが、受動的ではなく、極めて能動的だったのは間違いないと思われれます。新時代の女性とも言うべきでしょうか？当時としては珍しく夫の浮気を断じて認めず、頼朝の愛妾で亀の前という女性の家を破壊しています。この時代の身分の高い男性は正妻以外にも多くの女性と婚姻関係を結んでいました。正妻であろうともこれを受け容れなければならなかったのですが、政子は違っていました。

もう一つ、頼朝には最初の妻の八重と政子以外の女性に、貞暁(じょうきょう)という男子を産ませていたのですが、これが政子にばれてしまい大変な騒動になったのです。庶腹とはいえ、將軍の血を引く男子であることは動かし難い事実であったのですが、政子の怒りを買いたくなかったのか、頼朝に仕える有力御家人の誰もが貞暁の後見人になろうとはしませんでした。みんな亀の前事件の経緯を知り尽くしていますから止むを得ませんが…因みに貞暁は頼朝同母妹が嫁いでいる都の貴族を頼って上洛、その後見のもと有力寺院に入り出家しています。貞暁出発の際、頼朝は密かに息子を訪ねて太刀を授けています。我が子の無事を願う父頼朝の気持ちが察せられます。

但し、政子は恐ろしい！という一言で片づけられる様な単純な女性ではなく、非常に愛深き女性でもありました。兄頼朝と対立して行方不明となった源義経の愛妾で有名な白拍子だった静御前(しずかごぜん)が鎌倉に護送されて、鶴岡八幡宮で舞を奉納することになった時、義経への慕情を表現した舞を敢然と披露して頼朝の怒りを買ったのですが、彼女を懸命に擁護したのが他ならぬ政子でした。自分も貴方との結婚を周囲に反対されたにも拘わらず、駆け落ちまでして貴方の許へ奔った。それは恋を貫きたいという一念のみであった。私は義経殿を慕う静の気持ちが痛い程わかる。どうか彼女を罰さないで欲しい、と懇願した結果、頼朝もこれを認めて静を許したとされています。絶対的な権力を有したカリスマとして、鎌倉に君臨する頼朝に

堂々と物申したばかりか意見を通させてしまう政子も、夫と同じく鎌倉ファーストレディに相応しい風格を帯びていたと思われます。後年、頼朝後家として夫が有していたカリスマ性を受け継ぐことになります。

3. 政子は正室ではなかった？

実は政子は正室ではなかった！といったら皆さんは驚かれると思います。頼朝の最初の妻は伊東祐親の娘八重、政子は二番目の妻(継室)になるのですが、夫が鎌倉殿、さらには将軍となったので、必然的に御台所(ファーストレディ)の座に納まったとされています。但し、これはあくまでも結果論であり、本来伊豆の中小在地武士の一人に過ぎない北条家では、武門源氏の棟梁たる頼朝の正室としては家格が余りにも釣り合わなかったのです。もし頼朝が他の源氏一門や北条家よりも遙かに有力な御家人、さらには都の有力貴族から新たな妻を迎えていたら、政子は忽ち正室から側室へと降格されることは必定でした。しかし頼朝は自分の政治的地位が盤石になってからも、それに相応しい新しい妻を敢えて迎えようとしなかったのです。

譜代の家臣を持たない頼朝にとって、政子の実家北条家は掛け替えのない親族であり同時に政子の気質を十分知り抜いていた頼朝の配慮もあったのではないのでしょうか？加えて、政子は頼朝の間に二男二女を儲けていますが、何といっても嫡男であった万寿(まんじゅ)こと頼家を産んだことが、彼女の正室としての地位を盤石せしめたことは間違いないと思われます。参考までに政子の子供達の生没年は以下の通り…大姫(1178～1197)、頼家(1182～1204)、三幡(1186～1199)、実朝(1192～1219、もうお分かりだと思いますが、彼女は四人全ての子に先立たれてしまっています。

政争で亡くした二人の息子、心を病んだ末に儂い命を散らした長女、夫の死から僅か数か月に後を追うかの如く亡くなってしまった次女等…彼女の後半生は鎌倉殿後家としての輝かしい公的生活とは対照的に、一人の母親としては逆縁の悲しみと苦しみに悩まされています。鉄の女は一人の心弱き母親でもあったのです。

4. 頼朝の死 将軍生母として政治の舞台に立つ1199年に頼朝が謎の死？を遂げ、未亡人となった政子は落飾して尼御台となったのですが、父の跡を継いだ年若い頼家・実朝の生母・後見人として幕府を支える政治家への道を否応なく進むこととなります。但し、それは同時に、頼朝を支えて来た多くの御家人達、さらには大切な二人の息子等、権力闘争の犠牲となった多くの人々の死を見送るという過酷な道でもあったのです。

1203年、二代将軍頼家の外祖父北条時政と(頼家の)外戚の比企能員(ひきよし)との権力抗争が起こったのですが、この時、御家人達に対して謀叛人比企一族を討て！という命令を下したのは、誰であろう政子でした。さらに政子は頼家を出家させて伊豆修善寺に幽閉、代わりに弟の実朝を将軍に擁立しました。翌年頼家は時政父子に暗殺されるという末路を辿ったのですが、実家の父と弟が我が子を殺害したことに、どの様な感情を抱いていたのでしょうか？

1204年、父時政と継母牧の方(りく)が実朝を廃して、自分達の娘婿を将軍に擁立しようとする陰謀を企んだ際も、政子は御家人達に命じて、時政邸にいた実朝を義時邸に移した後に、義時と共に父夫婦を追放しました。父親に引導を渡す形となったことに娘は後味の悪い思いを抱いたことでしょう。

1218年、子のいない実朝の後継者問題を解決すべく上洛、後鳥羽院の皇子のうち一人を将軍として鎌倉に迎えることを、院の乳母の卿二位兼子(きょうのにい)かねこを相手に交渉を行ったのですが、遠路はるばる老体に鞭打つことも辞さない姿勢に、彼女の使命感の強さが窺い知れます。

しかし、この翌年に唯一生き残っていた実朝が暗殺され、政子は全ての子供を失ってしまったのです。

5. 尼将軍政子と承久の乱 四代将軍は政子だった？1219年、次期将軍として、頼朝遠縁の九条三寅(当時2歳)が都より下向した際、政子はこの幼児の後見人となり、弟である執権義時の補佐を受けて将軍の職務を代行しました。この時を以て『尼将軍』と呼ばれるに至ったのです。

因みに、鎌倉幕府の正史である『吾妻鑑』(あづまかがみ)には、1219年(実朝暗殺)～1225年(政子死去)は、政子が四代将軍だったと記述されています。

1221年に勃発した承久の乱で、朝廷と戦うことに対して動揺する御家人達を前にして政子は、今こそ心を一にして頼朝から受けた恩義に応えよ！と結束を訴え、一大決戦を直前に控えた幕府を一枚岩にすることに大きな貢献を果しました。さらに、兵を率いて都に攻め上ったことも、政子の決断でした。

承久の乱から四年後、政子は69歳の波乱万丈の生涯を閉じました。前年姉に先立ち亡くなった義時の息子泰時(政子甥)が幕府のニューリーダーとなったことを見届けての大往生でした。様々な喜びと悲しみ、特に後半生は憂いに悩まされたものであったかもしれませんが、為すべきことを成し遂げた満足感の強い臨終だったと思われます。

6. 最後に

政子には現在に至るまで、悪女・奸婦・子殺し等々、時代によって様々な評価を受けています。そして時代によって、それも変化しています。

同時代の評『吾妻鑑』では、政子のことを前漢劉邦(ぜんかんりゅうほう)妻の呂后(りょこう)、わが国の仲哀天皇(ちゅうあいてんのう)后だった神功皇后(じんぐうこう)の再来と称賛しています。同じく、史論書『愚管抄』(ぐかんしょう)の著者 慈円(じえん)は、日本の歴史上仕上げ(入眼)の役割の多くを女性が果たしているとして、政子をその代表に挙げています。

続いて後の時代の評価をみますと…、南北朝時代の『神皇正統記』(じんのうしょうとうぎ)等では、幕府を主導した政治家政子への高い評価がある一方で、江戸時代に水戸徳川家が編纂した『大日本史』(だいにほんし)や、儒学者新井白石(あらいはくせき)、頼山陽(らいさんよう)は政子について頼朝亡き後の鎌倉幕府を主導した功績は評価しつつも、子(頼家・実朝)の相次ぐ変死で婚家(源氏将軍家)が減びて、実家(北条家)が代々執権

としてとって代わった史実からこれを黙認した？ことが、婦人としての人倫に欠くのではないか、と批判しています。

また嫉妬深い(激情的とも)性格から、日野富子(室町八代将軍足利義政御台所)や淀殿(豊臣秀吉妻・秀頼生母)と並ぶ悪女とする評価もあります。この時代の主流を占めた儒学における人倫道德観の影響かと思われます。

こうして見て参りますと、政子の例に限らず、歴史上の人物評価は、その人が生きている間には定まらず、寧ろその死から100年、200年、さらには、それ以上後の時代に漸く決定するかもしれませんね… 現在に生きる私達も同じだと思います。

今、私達が出来ることは、限りある自らの人生を精一杯生きて、その結果についての評価は、後の世に委ねるしかないと思います。だから今この時を全力で頑張れば良いと考えています。きっと政子も同じ気持ちだったでしょう。劇中で頼朝亡き後の政子の後半生を、小池栄子さんがどの様に演じられるのでしょうか？大変楽しみです。皆さんは如何でしょうか？

以上が今回の私の卓話の内容です。私が話したことで、歴史に興味を持って頂けたり『鎌倉殿の13人』を引き続き見たい、若しくはこれからは是非見てみたいと思っ頂けたならば、これに勝る喜びはありません。本日は短い時間でしたが、最後までご清聴賜りありがとうございます。